ＡＯ入試からみた高等学校の進学・受験指導
－山口大学ＡＯ入試エントリー者調査結果から－

山口大学　大久保　敦

１．はじめに

多くの高等学校では、進路指導部などの名称で生徒の進路指導を業務とする校務分掌が存在し、この進路指導部や学級担任あるいは学年主任を中心に進路に関する指導が行われているという（仙崎他，1989）。進路指導の内容は高等学校学習指導要領（文部省，1999a）に、「特別活動　Ａホームルーム活動　(3)学業生活の充実、将来の生き方と進路の適切な選択決定に関すること」と定められている。また、高等学校学習指導要領解説特別活動編（文部省，1999b）では「この（進路）相談は、卒業の時期に限らず、入学から卒業までを見通して、生徒自らの在り方生き方を考え主体的に進路を選択決定する事ができるよう計画的、継続的な実施について配慮する必要がある」とある。一方、近年の山口大学において入学後の学生の中に明らかにミスマッチを起こしている者が目立つとの指摘がある（中村，2000など）。学習指導要領通り高等学校において進路指導が機能していれば、ミスマッチを完全に解消することは無理としてもこのように目立つようなことにはならないはずである。

このような状況を受け、山口大学では入試の過程の中に大学情報の提供や進路指導の要素を含めることによって「ミスマッチを解消」することなどをねらいとして、平成14年度入試から経済学部、理学部、工学部の３学部においては新入生対象のＡＯ入試（以下「ＡＯ入試」と記述）を、及び医学部においては学士を対象とした編入学ＡＯ入試を導入した。このうちＡＯ入試は学力検査を課さず、複数回の面談・面接や体験授業を通して、受験生にとっては大学をよく理解してもらう、つまり大学情報や進路指導の機会を提供しながら、人物や学部適性を総合的に評価する方式を採用した。

この14年度ＡＯ入試実施に際して、筆者はエントリー者に対しアンケート方式の調査を行った。調査そのものはエントリー者の意識や学校の対応を把握し、ＡＯ入試の今後の改善のための資料を得ることを目的とした。また、その詳細については別稿にてすでに報告した（大久保，2002a,b）。この調査結果の中で特に印象的だったのは、学校長の推薦によらない自己推薦方式としたＡＯ入試といえども、高等学校によっては学校側の強い指導が生徒に働いていることが示唆されたことと、及びこのような状況下であっても、エントリーした高校生はＡＯ入試の過程において大学情報の提供や進路指導の要素が含まれていたことを評価してくれたことであった。ＡＯ入試が多くの大学で導入される以前における高等学校の進学指導の全国的な実態については、大学入試センターが行った一連の調査報告（仙崎他，1989、柳井他，1990、仙崎他，1991）がある。進路指導に関して当時と比較して異なる状況としては、ＡＯ入試拡大とともに高大連携にみられる大学側からの高校生に対する大学情報の提供や進路指導が一般化しつつあることである。本稿では今回の調査を基に、山口大学のＡＯ入試からみた高等学校の進学・受験指導の動向の一端を紹介するとともにその課題を考察した。

２．調査の概要

（１）調査方法

平成14年度ＡＯ入試エントリー者に対して、面談時にアンケート形式で調査を行った（全エントリー者267名に対する回答者数及びその割合は160名、59.9％）。調査内容は、ＡＯ入試の情報入手方法、ＡＯ入試受験の経緯や動機、ＡＯ入試に対する高校の対応や指導、ＡＯ入試の評価等及びフリーアンサー（意見、感想、希望）の５分野合計32項目である。

（2）調査結果の概要

1）ＡＯ入試の情報入手方法

ＡＯ入試の情報については「学校の先生」から最初の情報を得たとする者が顕著(65.2%)であった。この結果は、学校の進路指導で山口大学のＡＯ入試受験を積極的に勧められたとする者が多い結果(66.1%)とよく調和する。つまり、高等学校においては最初の情報は教師が媒体として重要な役割を担っていることが推測される。しかしながら、最初の情報は「学校の先生」の口コミであるが、その後の情報媒体の主体はホームページに移行する。つまり、79.8%の者が山口大学のホームページを閲覧し、そのうち82.9%の者が役に立ったと回答している。なお、ホームページで役に立った情報としては、ＡＯ入試の日程や内容、学部・学科の詳しい情報、各研究室の研究内容、今の応募状況、など即時性、具体性のある情報が評価されている。

2）ＡＯ入試受験の経緯や動機

エントリーを「自分で決めた」とする者が67.7%を占め、自分の意志でエントリーするＡＯ入試の趣旨がほぼ生かされた結果となった。しかし、学校（形式上は学校長）の推薦を要件としないＡＯ入試において、「学校の先生のすすめ」を29.7%の者があげていることは注目に値する。このことは、先ほどの学校の進学指導で多くの者(66.1%)がＡＯ入試受験を積極的に勧められていると回答していることとあわせて、高等学校の進学指導がＡＯ入試受験の決定に大きく影響を与えていると推測される。

志望順位では「山口大学が第一志望」のものが91.2%と圧倒的に多いこと、及びエントリー時における他大学ＡＯ入試や推薦入試との併願希望者が少ない(１名)ことが特徴的であった。さらに、ＡＯ入試で合格しなかった場合、何かしらの形で再受験を考えている者が75.2%と多く、エントリー段階での山口大学への志望意欲の高さが顕著であった。しかし、実際の再受験者は不合格者192名に対して56名(29.2%)にとどまった。また、再受験者のうち、特に一般入試では44名受験して合格者が8名と極端に少なかったことも判明した(推薦入試では26名が受験して17名合格)。従って、受験の動機で「学力試験がないから」との回答が8.3%と少ないものの、「多面的に自分を評価してくれるから」との回答が62.2%と多いことから判断すると、受験（エントリー）動機に選抜方法が大きく関係しているものと推測される。

3）ＡＯ入試に対する高等学校の対応や指導

先に、ＡＯ入試に関する最初の情報は「学校の先生」から提供されること、また進路指導においてＡＯ入試受験を勧められるなどの回答が顕著であったことを紹介した。次に、ここではこれ以外の高等学校の対応について全体的な傾向を述べる。

エントリーすることについて80.6%の者が「学校の先生」は好意的であったとしている。また受験指導に関してはエントリー票記載で66.5%、面談準備で42.6%、体験授業準備で25.2%の者がそれぞれ「学校の先生」から指導を受けたと回答し、特にエントリー票と面談での指導実施率が高いことが特徴であった。しかし、これらの指導は高等学校の大学進学状況によって顕著な違いがあることが判明した。エントリー者の回答を高等学校ごとに集計し、その傾向を分析した。その結果、山口大学のAO入試に対して高等学校の対応には、おおよそ次の３つの傾向が認められる。つまり、①普通科進学校（山口大学への進学実績が昨年度10名以上の学校）では、ＡＯ入試に対して総じて消極的。②専門学科や普通科非進学校（山口大学への進学実績が昨年度0名または1名の学校）では、AO入試に対して進学指導や受験指導は、かなり積極的かつ組織的。③普通科中堅進学校（山口大学への進学実績が昨年度複数名でかつ10名未満の学校）では、多様な対応（学校ごと、あるいは同一の学校内でも教師ごとに対応がまちまち）であった(表1～3)。

4）ＡＯ入試の評価

「山口大学のＡＯ入試にエントリーしてよかったこと（複数回答可）」としては、「大学や学科の様子がわかった」108名、「体験授業に参加できた」93名、「大学の先生と話ができた」92名、「進路に対する自分の考えがまとまった」61名などの回答が際立った。一方「良かったことはない」とした者はわずかに２名で、ＡＯ入試に対して高い評価をしていることが判明した。このことは「山口大学のＡＯ入試を後輩にも勧めた

いですか」に対して、「ぜひ」と「できれば」を合わせた「勧めたい」とする回答が85.4％に対して、「あまり」と「絶対」を合わせた「勧めたくない」とする回答0.7％を圧倒的に上回ったこととも調和的であった。

３．高等学校の進学・受験指導の実態

前章(3)において山口大学のＡＯ入試に対する高等学校の対応には、大きく３つの傾向が認められることを述べた。ここでは紙面の都合上、ＡＯ入試に対して特徴的な傾向がみられた後二者に絞りその実態を紹介する。

（１）専門高校などの積極的、組織的対応

合格者を出した公立のＡ商業高等学校を一例にあげると、この高等学校では四年制大・短大進学率は専門高校としては高く４割を越えるが、一般入試での進学は、進学者全体の２割強に留まる。高等学校としても進学希望者の増加に対応すべく、推薦入試やＡＯ入試に積極的に学校の戦略として対応していることが、同校が公開している公式ホームページ上からも読み取れる。さらに、このことは出願者の高等学校の成績にも顕著に現れており、たとえば調査書の評定平均が極めて高く、生徒会役員やスポーツで優秀な成績をおさめた生徒を送り込んできている。また面談において、ある公立専門高校の生徒証言から個人の意志で自由にエントリーすることができるＡＯ入試において、出願者を絞るためすでに校内選抜が行われている事実も明らかになった。これらのことから、エントリー者への進学・受験指導も学校推薦の延長線上で捉えられ、組織的にしかもかなり強い指導が行われている実態が見えてきた。さらに、エントリー票記載の際の指導はもとより、面談に対する指導の実施率が高いのも特徴である。このタイプの高等学校からのエントリー者には魅力的な生徒もいる反面、面談・面接において画一的でよく訓練された対応をする生徒が多く、高等学校側の進学・受験指導の在り方に疑問を感ずる部分もあることは否定できない。

（２）普通科中堅進学校の多様な対応

１）戦略として取り組む学校(表1)

このタイプの高等学校は、エントリー者の合格率が極めて高い場合と、まったくその反対の場合がみられる。アンケートの結果からも、学校全体の進学・受験指導の場面で山口大学のＡＯ入試に対する指導が行われていることは読み取れるが、さらに進路指導担当や学級担任がＡＯ入試に適性を持つと判断した生徒を個別にエントリーの勧誘を行っていることが面談での証言で明らかになった。このタイプの高等学校では、一般入試を基本としながらも、推薦入試あるいはＡＯ入試を生徒の特性に応じて使い分け、受験指導が組織的に行われているものと思われる。しかし、指導に当たり山口大学ＡＯ入試の意図をどのように解釈したかが、結果を大きく分けているものと考えられる。

２）関心ある教師が取り組む学校(表2)

このタイプの高等学校は、エントリー者の合格率は極めて高い。アンケートでは高等学校での山口大学のＡＯ入試に対する説明は、エントリー者によって有ったり、無かったりとまちまちであるが、ＡＯ入試受験を希望する生徒の担任は、エントリーを好意的に受け止め、かつエントリー票記入、面談、さらに体験授業の対策指導を確実に行っていることが読み取れる。基本的には、一般入試で進学実績をあげるという、進学校に準じたコンセプトを組織として持つが、教師集団は個人ごとにＡＯ入試に対して異なった捉え方をしていると思われる。そのような中で、特にＡＯ入試に対して意識の高い教師が生徒の特性を見極め、進学・受験指導をしている姿が浮かび上がる。このことは「受験学力には不安が残るが、授業など普段の教育活動で顕著な実績を示している生徒を何とかしたい」という、このタイプのある公立高等学校の学級担任の話からも裏付けられる。

３）ＡＯ入試に消極的な学校(表3)

このタイプの高等学校では、アンケート結果によると、山口大学ＡＯ入試に対する説明は、一応行われている場合が多いものの、エントリーを積極的に勧めている場合は少なく、しかも生徒がエントリーすることに対して担任は、好

表１　AO入試を学校の戦略として積極的に取り組んでいると思われる高校のエントリー者の回答

出身高校名	科	説明有無	説明内容	先生反応	エントリー票の指導	体験授業指導	面談指導	エントリーきっかけ
公立A高校	普通	あり	積極的	大変好意的	先生指導	自力	先生指導	担任勧め
公立A高校	普通	あり	積極的	大変好意的	先生指導	何もせず	自力	担任勧め
公立A高校	普通	あり	積極的	大変好意的	先生指導	自力	先生指導	担任勧め

表２　学校として統一戦略を持たないが意識の高い教師が取り組んでいると思われる高校のエントリー者の回答

出身高校名	科	説明有無	説明内容	先生反応	エントリー票の指導	体験授業指導	面談指導	エントリーきっかけ
公立B高校	普通	なし	なし	大変好意的	先生指導	先生指導	先生指導	担任勧め
公立B高校	普通	あり	積極的	大変好意的	家族指導	先生指導	家族指導	担任勧め
公立B高校	普通	あり	消極的	大変好意的	先生指導	自力	何もせず	自分で決定
公立B高校	普通	あり	他と同様	大変好意的	自力	自力	何もせず	自分で決定

表３　AO入試に対して消極的と思われる高校のエントリー者の回答

出身高校名	科	説明有無	説明内容	先生反応	エントリー票の指導	体験授業指導	面談指導	エントリーきっかけ
公立C高校	普通	あり	消極的	非好意的	自力	何もせず	自力	自分で決定
公立D高校	普通	あり	消極的	普通	自力	自力	自力	自分で決定
私立E高校	普通	あり	消極的	非好意的	自力	自力	自力	自分で決定
公立F高校	商業	なし	なし	非好意的	自力	家族指導	家族指導	自分で決定

意的に捉えていないという実態が見えてくる。その結果、エントリー対策の指導の実施率も低いのが特徴である。基本的には、一般入試で進学実績をあげるという、進学校に準じたコンセプトを組織として持ち、かつ教師集団も同様の認識を持っていると考えられる。

このように特に、中堅進学校や専門高校の中には、ＡＯ入試に対して明らかに不適切な進学・受験指導を行っていると思われる高等学校の存在も明らかになった。受験シフトの中で、中堅進学校では、受験に効率的に対応した教育課程を整備はしているが、そこから外れるタイプのAO入試に対して、進学実績を上げるために積極的に取り組む高等学校と、リスクの高いＡＯ入試を避け、従来の方針を堅持していこうとする高等学校を両極とすると、その狭間で多くの高等学校が揺れていると解釈している。一方、専門高校では、社会の急速な変化の中で進学率の上昇に対応できない教育課程の存在が、進学・受験指導を狂わせていると考えられる。

４．ＡＯ入試に見る進学・受験指導の課題

（１）ＡＯ入試における進路指導の機能

冒頭で述べたように山口大学のＡＯ入試ではミスマッチを防ぐため、進路指導や大学情報の

提供などの機能を含めた方法を採用した。つまり、高校生が実際に大学に集まり、そこでかなりの時間を費やして大学教官と面談し、直接アドバイスを受け、また体験授業や実験・実習の参加などと、かなり密度の濃いプログラムが提供される。実際、第２章で述べたようにＡＯ入試の評価で「大学や学科の様子がわかった」、「体験授業に参加できた」、「大学の先生と話ができた」、「進路に対する自分の考えがまとまった」という回答が目立った。これらの回答結果から判断する限り、学習への動機付け、幅広い教養の育成、自己の適性確認、あるいは進路や職業選択など、進路指導の機能がある程度有効に働いているものと解釈できるが、ミスマッチの防止も含めその成果は今後の追跡調査の結果に待たれる。なお、山口大学のＡＯ入試は進路指導や大学情報提供などの機能を含んではいるが、現段階では入学者選抜の一手段にすぎない。高等学校との連携については今後の課題である。

（２）大学内連携の必要性

現在、山口大学に限ってみても高等学校との間には、オープンキャンパス、出張講義、受入講義など、いわゆる高大連携に関する各種プログラムが展開されている。しかも、これらのプログラムに共通することは、主催母体が学部、学科、教室あるいは教官個人に至るまで様々であり、全学体制で実施されていないという特徴を持っている。また、このような状況は、他大学においても全国的な傾向として認められるという（鈴木，2001）。これはサービスを受ける高校生側にとっては、窓口が分散し非常に手間のかかることである。従って統合や整理などして、効率的なシステム構築を考える時期にきている。一方、先に述べたように山口大学のＡＯ入試では、進路指導や大学情報の提供が全学体制でエントリー者に提供できる学内連携システムが完全とは言えないまでも実現した。従って、ＡＯ入試での学内連携のノウハウを、高校生に対する大学側からの進路指導・大学情報提供に積極的に応用することも検討すべきであろう。

（３）高等学校の進学・受験指導と大学の情報提供サービスとの連携

調査結果から、受験や大学の内容に関する詳細な情報については、ホームページを媒体とした大学側からの情報が大きく影響していることを述べた。この背景には、高校生にとって利用しやすいインターネットを主体とするネットワーク環境が、各家庭に急速に整備されたことがあげられる。

また、近年高校生が大学で講義を受ける受入講義や大学教師が高等学校に出向いて講義等を行う出張講義などのいわゆる高大連携のプログラムが急速に広まっている。多くの大学にとってこれらを行う主たる目標や期待は「主体的進路選択を喚起させるための情報提供」や「大学を知ってもらうための情報提供」であるという(鈴木，2001)。ネットワーク及び高大連携プログラムとそれぞれ方法は異なるが、このような大学側からの高校生への働きかけは、従来見られなかった形態である。

一方、初期の受験情報や受験動機に関する部分では、高等学校の教師の指導が大きく影響していることは、すでに述べたとおりである。従って、今後は高等学校側の進学・受験指導と大学側の情報提供が望ましい形で連携をとる体制作りが急がれる。さもないと、結局混乱するのは高校生であるということを高等学校及び大学は、共に自覚すべきであろう。

（４）専門高校の大学への接続と進学・受験指導

学力検査を課さない山口大学のＡＯ入試は、専門高校からの大学受け入れを結果として促進する形となった。実際、今回のＡＯ入試では専門高校からの合格者が約三割を占めた。一方、調査結果からは、その進学・受験指導に問題を感ずる部分も浮かび上がってきた。しかし、専門高校側のそのような状況を一歩的に批判してばかりもいられない。つまり、その背景には、近年の専門高校からの四年制大学進学率の上昇、及び専門高校出身者を対象とした、選抜も含めた大学への接続システムの対応が十分ではないことがあげられよう。このような急速な状況の変化は、専門高校側も大学側も共に予測していなかったのではないだろうか。その歪みが専門高校の現場で進学・受験指導という形で現れているのではないかと推測する。最近、専門高校のホームページを閲覧すると、四年制大学進学の実績を示したり、四年制大学進学を学校の方針のひとつとして掲げている専門高校も現れ始めている。このような動きをみていると、専門高校の中でも大学進学に関して二極化現象が起

こっているようにも見える。今回の調査から浮かび上がった専門高校の大学への進学・受験指導の在り方を考える上でも、早急に専門高校の進学・受験指導も含めた進路指導の実態を把握する必要があろう。

引用文献

大久保敦(2002a)　平成14年度山口大学AO入試エントリー者調査結果、平成13年度山口大学アドミッションセンター研究報告書、17-36.

大久保敦(2002b)　受験シフトと山口大学方式のAO入試、平成13年度山口大学アドミッションセンター研究報告書、37-44.

文部省(1999a)　高等学校学習指導要領、大蔵省印刷局、388p.

文部省(1999b)高等学校学習指導要領解説　特別活動編、東山書房、157p.

中村彰治(2000)学士入学に関する調査・研究（続）－ＡＯ入試による選抜－、平成11年度入学者選抜方法研究委員会報告書、山口大学、81-88.

鈴木規夫(2001)高大連携の取り組みに対する大学の意識、平成12年度文部科学省教育改革推進のための総合的調査研究委託報告書「高大連携の新しい取り組みに関する調査研究」（研究代表者鴫野英彦）大学入試センター研究開発部、11-24.

仙崎武・藤原正光・柳井晴夫 (1989)　高等学校における進学指導－その実践活動の分析（第１次報告）、大学入試センター研究紀要、NO.18,73-119.

仙崎武・柳井晴夫 (1991)　高等学校における進学指導－その実践活動の分析（第２次報告）、大学入試センター研究紀要、NO.20,167-204.

柳井晴夫・前川眞一・豊田秀樹・鈴木規夫・仙崎武・赤木愛知・中島直忠 (1990)　高等学校における進学担当教師を対象とした進学指導の実態に関する調査研究－学力偏差値を主とした進学指導の改善を中心として－、大学入試センター研究紀要、NO.20,73-120.